



◆当面の予定

- 5/18(木) 防災退避訓練
- 25(木) 大学見学会 @大阪大学 (豊中)
- 26(金) 前期中間考査2週間前突入
- 30(火) 体育祭準備+球技大会
- 31(水) 体育祭 (6/1まで順延あり)
- 6/1(木) 大掃除+65分授業×5
(体育祭実施日の翌日)
- 2(金) 前期中間考査1週間前突入
教室開放期間 (~6/14 水の平日)

◆為さないものは成りません

冒頭の「当面の予定」を見ましたか?今号の学年通信の配付日が、学校生活のスケジュール上のどの位置付けにあるのか、現在地を確認しましょう。今号配付の10日後が大学見学会、その翌日は前期中間考査2週間前に突入です。(当然ながら)そこから2週間後には、前期中間考査が始まります。当然ながら、試験2週間前の期間には、試験範囲=2年4月以降に学習した内容を中心に学習することになるでしょうから、もし1年生の学習内容で不足している分があるとすれば、2週間前突入までに取り組んでおく必要があります。

では、1年生の学習内容で不足している分とは何か——それを簡潔に示すのが、スタサポの「弱点克服ドリル」です。スタサポの成績資料返却が5/11(木)LHRでした。この学年通信配付までの土日で、取り組み終わりましたか?全国集計の結果、明らかに自分にとって目標未達の箇所を示してくれているのですから、既に解いたという人も、確実に解けるか・確実に覚えているか、もう一度取り組んでもいいくらいです。いわんや、まだ解いていないといふ人をや——です。2週間前から試験勉強に注力し始めることから逆算すると、「弱点克服ドリル」の賞味期限は5/26ということになります。この

機会を逃した人が、同様の内容(1年生の学習内容で穴が開いている部分)に取り組む次の機会は、おそらく2年3月。または、取り組まないまま3年の演習にのぞむか、です。今やっても後からやっても、かかる労力は同じです。しかし、今やった方が効果は大きい。今ここで取り組んでおけば、2年生の学習内容の理解を支え(やっとなければ理解もあやふや)、後回しにできなかった分、3年での学習スケジュールを圧迫することはありません。やる労力は同じ。でも、今やるのと後でやるのとでは効果が違う。だったら結論は「今やる」、ですよね。

2年冒頭の進路集会で、「2年のうちに下げてしまわない。下げずにすめば、3年で目標水準まで持って行きやすくなる」という話がありましたね。この話は学年通信の第16号(2022年12月23日発行分)にも、「2年までで一旦下がってしまった水準から伸ばしていくのと、下がらずに推移してきた水準から伸ばしていくのでは、同じ伸び率であっても、最終の到達水準が異なってきます」と書きました。勿論、2年生の間にも伸びる方がいいに決まっています。しかし、少なくとも“下げない2年生”が達成されれば、3年冬に目指す水準が大きく近づくのです。「平日90分」は、そのための一つの取り組み指標なのです。

ところで、今回のスタサポの学習習慣調査の結果を見ると、77期で「平日90分以上」に取り組んでいる人の割合は、ベネッセが示す「今年合格した全国S層・A層」に対し、半分程度でした。ここで一度、自分の身の周りの人(クラスメイトや同じ部活の人など)の様子を思い描いてください。感覚としては、“今のままで何とかなる”ではなく、“平日90分以上”を達成している人は、今の2倍いるのが当たり前”と、認識を改める必要があります。なお、77期の割合は76期2年次に対しても10pt以上低い

ものでした。自分の身の周りに漂う感覚は、それが自分たちと同レベルの高校生の全てではないということを理解しましょう。人間はどうしても、環境に流されてしまいがちな存在です(特に生野の生徒は、周囲と同程度であることに安心感を覚える傾向が強くなります)。だからこそ、自分の感覚や身近に漂う感覚が、実態の全てではないことに、自覚的であらねばなりません。模試レポートの提出率も、クラス間で大きく差がありました。自分のクラスで“あまり提出していない”感覚だったとしても、それが77期の実態の全てではないのです。自分たちが思っている以上に、“取り組むのが当たり前”という感覚の77期生が数多くいるのです(この話は進路NEWSにも書かれていましたね)。

もう一つ、スタサポの学習習慣調査では「成績を伸ばしたいが方法が分からず悩む」という回答が目立っていました。私(高崎)の感想を率直に書きます。「そら、こんだけやってなかったら分からんわな」です。

「やり方が分からない」——そもそも、物事はやり方を完全に分かってから取り組み始めるものでしょうか?より速く・より遠くへボールを投げる方法を分かり、理解してから投げ始めるのですか?より速く走るための腕の振り・足の上げ方・運び方を分かり、理解してから走り始めるのですか?咀嚼の仕方をマスターして、初めて食べ物を口に入れるのですか?そんな訳ありませんよね?まずはやり方を教えてもらう。あとは、自分で投げてみるのみ。自分で走ってみるのみ。自分で食べてみるのみ。それを実践しながら、出来るようになっていくのではありませんか?5月の連休明けから、応援団の練習に参加している人もいますよね。振付の手の上げ方・身のひねり方を理解してから、振付の全体像を理解してから、練習に取り掛かっているのでしょうか?練習しながら体得していつているのではありませんか?大抵のことは、やってみなければ身に付かないものです。

生野の生徒の、もう一つよく見られる傾向に“一発でキレイな答えを作ろうとする”が挙げ

られます。頭の中でよく考えて、いきなり“よく整った答え”を作る——やるならきっちり、という生野生の気質のようなものでしょうか。この傾向は、特に探究の授業で顕著に現れます。しかし、それは一方で、“きっちり出来ないのであれば、やらない”であったり、“それなりにまとまったものになるまでは表に出さない”と表裏一体であることがしばしばです。もっと色んなことに対して“荒くてもいいから、まず手持ちの素材で答えを組み立ててみる”、“組み立ててみて試行錯誤しながら完成度を上げていく”という営みに取り組んでほしい。勉強も同じです。一発でカタチになるやり方をマスターするまで手が付かない…ではなく、やりながらやり方を身に付けていく。過去の卒業生からの後輩へのメッセージでは、「この教科の勉強はこんなふうにやっていました」という記述が多くみられますが、それらも初めからそのやり方でうまくいくということを知って取り組んでいた訳ではありません。自分なりに“こうすればいいのではないか”と試行錯誤しながら、うまくいくやり方にたどり着いているのです。“量より質”を求めたがる気持ちは分からないでもないですが、量より質は、一定以上の量を前提としています。量あつての質。卒業生からのそうした行間のメッセージも読み取ってほしいと思います。

「やり方が分からない」という人は、まずはやってみること。どういったことをすればいいのか全くイメージが湧かない人は、学年ホワイトボードの取り組み例を真似てみる。弱点克服ドリルを5月中に2~3周取り組んでおくこと。「努力の天才であれ」とは某予備校のキャッチフレーズですが、今の勉強量でこの水準に位置しているのですから、しっかりやれば十分に伸びていきます。自分の伸びは自分の隣人の伸びにつながり、隣人の伸びは自分の伸びに波及してきます。周囲と同程度であることに安心感を覚える傾向が強い集団ですから。そうした集団の気質を強みに変換していきましょう。